

論文

源氏鶏太 BG 小説における「働くヒロイン」の飲酒と結婚
——雑誌『酒』との比較を通して——

石黒久美子

1. はじめに

本稿では、サラリーマン小説で有名な源氏鶏太（1912–1985）が、1950年代後半から1960年代前半にかけて執筆したビジネスガール（以下、BG）をヒロインとした小説、いわゆるBG小説について、ヒロインの飲酒行動と、恋愛の行方、つまり結婚に至るかどうかの関連性に着目し、読者に対してどのような女性の飲酒態度を規範として提示しているかを考察する。

BGとは、会社勤務する若い女性事務員の事で、サラリーガールと呼ばれる場合もあった¹。女性の飲酒の歴史を考える上でBGは重要な存在である。戦後、女性の飲酒はBGを中心に盛り上がりを見せたのである。

女性の飲酒の歴史を概観すると、江戸期までは女性も比較的自由に飲酒していたが、明治期になり抑圧されるようになった。その理由は、家父長制の浸透による女性の地位低下や矯風会による禁酒運動（阿部 472–476）、自家醸造の禁止と経済的自由の剥奪（安井 214）等と考えられている。明治期以降、飲酒が社会的に許されるのは、芸者等、水商売に従事する「玄人」女性だけで、「素人」女性の飲酒は文化的禁忌となった。しかし女性には酒の場で酌役割が求められており、有償で酌をする「玄人」女性は飲酒するが、無償で酌をする「素人」女性は飲酒しないという分断があった（阿部 482–496, 518–520）。「素人」女性が社会的に飲酒するようになるのは、戦後、1955年頃からである。

1950年代後半の女性の飲酒について、石黒久美子は、雑誌『酒』（酒之友社、1950–1997年）の記事から考察を行っている（石黒 72–92）。『酒』は、酒に関するエッセイや座談会記事を掲載した雑誌で、1956年以降は佐々木久子が編集長を務めた。1957、58年には女性の飲酒に関する記事を多く掲載している。その中から、酒蔵の人々と佐々木の

座談会記事である「酒づくり二世さんと語る 女性開拓」を見ると、菅原雅（伏見男山）²と佐々木がビヤホールに女性客が増加したと語っている。

菅原（雅）（前略）数寄屋橋のニッポンビヤホール、あそこへ昭和二十六年頃に行つた時は余り女の人がいなかつたが、最近は実に多くなつた。女の人が自分等で飲めるといふことが魅力なんですね。それで非常に女の人の方が大きくなつたと思ふんです。

佐々木 そうなんです。東京のビヤホールは、ラッシュ時分は、女性が四割位です。それは凄いですよ。こんなに日本の女性が飲むようになったことは、日本酒がビールに段々追いやられて行くんじゃないかと思うんですが……（天江ほか 62）。

更に、天江秀次郎（天賞）の質問に対し、佐々木は飲酒している女性達は BG であると答えている。

天江 ところで佐々木さん、そういう女性の酒類を飲む人口が増えて来たという理由を一つ、女性の側からお話になつて頂けませんか。

佐々木 今の東京の例のことしか申し上げられませんが、飲んでいる人達はサラリーガール、自分で経済的な力を持つている人達ですね。主婦ということになつて来ると、まだその段階ではないようです。ビジネスガールのうちでも一番多い二十から二十五の人達というのは、新しい教育を受けて、男女同権の息吹を大きく吸つたわけです。会社のリクリエーションなどで、飲むことに慣らされて来たんですね。それも男の人達と行つているんじゃないかと、女同志で行つているの。トリスバーなんか半々くらいです（天江ほか 62）。

また、歌手や作家等と佐々木の座談会記事である「春宵 ほろ酔い口ぜつ 男性をサカナに」では、佐々木、池田みち子（作家）、笠置八千代（評論家）が、女性が飲酒する動機は職業的な進出と述べている。

佐々木 ところで最近女の人で酒を飲むかたが大変多くなりましたが、女の人が酒を飲む動機というものはどんなところでしょう。

池田 一般的にいえばやはり職業的な進出でしょう。

笠置 解放感よ。

池田 家庭に閉じこもっている奥さんが戦争前に比べて飲むようになったかという、そうはなっていないと思います。なつたとしても、わずかなものだろうと思います。飲み屋に男の人と一緒にきている人が多いというのは、勤め先で一緒になつてきているわけで、社会的な進出というので飲むようになったらと思います。昔は飲むかたは花柳界とか女給さんたちだつたでしょう。いわゆるすつかたぎは飲まなかつたのですが、最近は飲むということが普通になつてきたですね（淡谷ほか 11-12）。

文中の「すつかたぎ」とは「素堅気」で、ここでは「素人」と同義と解釈できる。それまでは飲酒する女性は「玄人」だったが、「素人」が飲酒するようになったと述べている。

このように、石黒は 1957、58 年の『酒』の記事を分析し、以下のように述べた。戦後、1955 年頃から東京では女性の飲酒が増加し、特に BG がビールを飲む行動が目立っていた。BG が飲酒する背景には職業的な進出、経済力の獲得があった。一方、経済力を持たない家庭内主婦は飲酒していなかった。BG は男性に付随する形だけでなく、BG 同士で連れ立って飲みに行っていた（石黒 72-92）。

『酒』の記述からは、1950 年代後半における実際の女性の飲酒行動が読み取れる。本稿ではこれを踏まえつつ、1950 年代後半から 1960 年代前半の源氏 BG 小説を分析対象とし、同時期にフィクションの領域で女性の飲酒がどのように表象されたのかを考察し、『酒』に記述された女性の実際の飲酒行動と比較する。取り上げる作品は、女性読者を対象とした女性誌に連載された作品で、東京を舞台としたものを中心とする。

2. 源氏鶏太 BG 小説の特徴

戦後に人気を博した源氏のサラリーマン小説は、度々映画化もされ、「サラリーマンもの」流行の土台を築いた。真実一郎は、源氏のサラリーマン小説について、仕事をすする場面をほとんど描かず、社内の派閥争いや社内恋愛等人間関係の描写に重きを置いており、「仕事の成果よりも人柄がものをいう過剰な〈人柄主義〉」（真実 21）が特徴と述べる。井原あやは、源氏のサラリーマン小説と BG 小説を比較し、サラリーマンは人間関係の波に乗りさえすれば出世が成し遂げられると規定されているが、BG 小説にはそうした構図は見られず、ヒロインの恋愛模様が中心に描かれると指摘する（井原 [2017] 146）。

源氏の初の長編 BG 小説で、『婦人生活』（婦人生活社）1952 年 1 月号から 12 月号に連載された『向日葵娘』では、ヒロインが BG 達による「お茶くみストライキ」に参加せず、自分の意志を貫いた点が評価され、それまで男性社員が行っていた職印押捺簿整理の担当に抜擢される（源氏 2:163）³。また、社内に女性事務員による「会」が結成された際、初代委員長に就任する（源氏 2:232）。ここでは会社での出世が描かれたと言えるが、他の源氏 BG 小説では出世は描かれず、物語の主軸はあくまで恋愛となっている。

源氏作品は、「基本的に単純明快な勧善懲悪が貫かれている」（真実 20）と述べられるように、「幸せな結末」で終わる事が多く、BG 小説も例外ではない。恋愛を主軸にした BG の物語において「幸せな結末」とは、即ち結婚である。金野美奈子は「高度成長期の女性事務職をめぐる言説は、女性の職場経験のさまざまな要素を「結婚」と結びつける論理を展開しているが、それらは仕事を結婚のための準備と意味づける点で共通している」（金野 145-146）と述べる。源氏 BG 小説も同じく、ヒロインは会社で働いていると設定されながら、恋愛の結果として結婚する事が物語上の目標に置かれている。

このような源氏 BG 小説で、BG の飲酒はどのように描かれたのか。実際に BG の飲酒が増加した 1955 年頃よりも前の源氏 BG 小説でも BG の飲酒は描かれているが、その描写は少ない。『向日葵娘』は大阪を舞台とした作品だが参考までに触れると、ヒロインは好意を寄せる同僚男性とすし屋を訪れた際に、彼にビールを勧め、酌をし、自分は飲まない（源氏 2:248）。すし屋で知人の誕生日を祝う時、日本酒で乾杯する場面が簡潔にあるのみである（源氏 2:260）。若い世代向けの娯楽雑誌である『平凡』（マガジンハウス）1953 年 8 月号から 1954 年 1 月号に連載された『丸ビル乙女』では、ヒロインの 1 人が好意を持った男性の気を惹くために酒場でハイボールを飲んで酔い、愛を告白し、「そのかわり、好きになって貰えたら、もう、お酒を飲まないわ。きっと、可愛がって貰えるような娘になるわ」（源氏 2:283-284）と言う。ここには女性の飲酒が社会的に逸脱行為であり、飲酒しない女性が好まれるという前提がある。『婦人倶楽部』（講談社）1954 年 9 月号から 1955 年 12 月号に連載された『見事な娘』でも、ヒロインの飲酒場面は引っ越しの後、家族や手伝いに来た人々と一緒にビールを飲む描写が簡潔にあるだけで、むしろ母親に促されて酌役割をする所が強調される（源氏 10:126）。

これらの作品に比べると、1955 年以降の源氏 BG 小説は、ヒロインを始め女性の飲酒場面を多く描いており、実際に起きた飲酒する BG 増加の影響を感じさせる。源氏は、読売新聞夕刊に 1958 年 12 月 12 日から 1959 年 6 月 21 日まで連載した『実は熟したり』で、サラリーマンが BG に「僕はね、これからの女の人、ビールぐらい飲んだ方がいい、と思うんですよ」（源氏 20:9）と説く場面を描いており、女性が社会進出すると共

に飲酒するようになった事を奨励しているかのようである。

しかし、源氏 BG 小説では消極的な飲酒をするヒロインの物語が多い。次章からは、源氏 BG 小説を、ヒロインの飲酒態度が消極的か積極的か、また物語の結末で結婚するかどうかに着目して論じる。まず飲酒に消極的で、最終的に結婚するヒロインの物語を取り上げ、次に最初は飲酒に消極的であったが途中で積極的になり、結婚するヒロインの物語を取り上げる。最後に、飲酒に積極的で結婚しないヒロインの物語を見ていく。内容をまとめると【表】のようになる。ヒロインと、ヒロインの恋敵となる女性等の飲酒描写を比較し、源氏 BG 小説が消極的な飲酒を規範として女性読者に提示している事を指摘したい。

3. 飲酒に消極的、結婚するヒロイン

3-1. 『最高殊勲夫人』

『最高殊勲夫人』は、『週刊明星』（集英社）1958年8月24日号から1959年2月8日号に連載されていた。女性誌に連載された作品ではないが、女性の飲酒場面が多いので考察対象に加えたい。

本作は3姉妹と3兄弟がそれぞれ結婚する物語である。ヒロインは野々宮杏子、21歳で、丸の内の三原商事で働く事になる。杏子の2人の姉、長女の桃子と次女の梨子は、それぞれ三原商事の創業一族である三原家長男の一郎、次男の次郎と恋愛結婚をした。三原商事の社長夫人となった桃子は、杏子と三原家三男の三郎を結婚させて「世界制覇」しようと企む。杏子は桃子の勧めで三原商事に勤務する事になるが、桃子の思惑に乗るまいと社内で別の結婚相手を探そうと奮闘する。しかし、杏子と三郎は次第に惹かれ合い、最終的には結婚する。

それでは女性の飲酒場面について、杏子から見ていこう。杏子は、物語の開始時点では会社勤務をしておらず、飲酒経験もない。三郎に連れられて初めて銀座のバーを訪れる場面で「杏子は、勤めに出ているわけではなく、こういうところへくるのは、はじめてである」とある（源氏 15:16）。女性が飲酒の機会を得るのは職業進出してからとなっており、『酒』の内容と一致する。ここでは杏子は飲酒せず、レモンスカッシュを飲む。

杏子は BG になってから人生で最初の飲酒をする。初めて得た収入で、父親を銀座のどんかつ屋に誘い、そこで父親に勧められビールを軽く一口飲み、飲酒への興味を示す（源氏 15:101）。しかし、これ以降の飲酒は消極的で、飲酒量は少ない。次に同じとん

かつ屋を三郎と訪れた時にはビールをコップ半分、その後に訪れたバーでは三郎が杏子のために注文した低アルコールのカクテルを飲む（源氏 15:111, 118）。更に、とんかつ屋を同僚男性 2 人、同僚女性の岩崎豊子の 4 人で訪れた時も、ほとんど飲まない（源氏 15:143）。

ちなみに、豊子はビールをグラス 2 杯程度飲めるとされている。杏子よりは飲酒量が多いが、男性がビール瓶 2 本以上飲酒している事（源氏 15:66, 100–102, 116, 143）と比較すると少ないと言える⁴。豊子は最終的に同僚男性と恋愛を成就させる。

杏子は初めて飲酒した後も、飲酒に関しては消極的な態度をとっており、むしろ一緒にいる同僚男性、父親、三郎に酌をする姿が描かれる（源氏 15:62, 101, 111）。

次に、杏子の恋敵となる女性、三郎の婚約者である大島富士子の飲酒行動に着目する。富士子は大島商事の社長令嬢であり、BG より社会的に階級が上の「女性権力者」⁵である。酒場に親しんでおり、バーではジンフィーズを飲む（源氏 15:55）。積極的に飲酒を楽しむ女性と言えるが、最後は杏子に恋した三郎から婚約を破棄され、失恋する結末を迎える。

また、作中で実際に飲酒する場面は出てこないが、父親のセリフに、桃子、梨子は「ビールを一本ぐらい飲んだ」とある（源氏 15:101）。2 人はそれぞれ社長夫人、専務夫人という「女性権力者」の立場にあり、社長令嬢の富士子と同様に飲酒する女性として描かれる。

その他、歴史的に飲酒が抑圧される事が無かった「玄人」女性の飲酒として、芸者・ぼん吉が鬼怒川温泉の旅館で、一郎から日本酒を口移しで飲ませて貰う場面がある（源氏 15:128–129）。「玄人」女性の飲酒は他作品でも頻繁に登場する。

まとめると、ヒロインの BG は飲酒に消極的で最終的には結婚し、ヒロインの恋敵は飲酒に積極的で失恋する事になる。また、「玄人」女性と「女性権力者」は飲酒する存在として描かれる。

『最高殊勲夫人』は映画化されている（増村保造監督、大映、1959 年）が、杏子は原作よりやや飲酒に積極的に描かれており、バーで富士子に対抗してジンフィーズを注文する場面がある。しかし、それも実際に飲む事はなく、全体的に見ればやはり飲酒に消極的な女性となっている。三郎が杏子と富士子を比較して、杏子をレモンスカッシュ、富士子をハイボールダブルに喩える場面があり、杏子が酒から縁遠い女性であると強調されている。また、映画には桃子が自宅でハイボールを飲む場面や喫煙する場面がある。桃子の権力欲は原作より強く描写されており、これらは彼女の強い権力性を示すための表現と言える。

3-2. 『女性自身』

『女性自身』（光文社）1960年6月22日号から1961年3月7日号に連載された源氏BG小説は、雑誌名そのままに『女性自身』という作品名となっている。本作は、丸の内にある東京化学工業株式会社の総務課に勤務する22歳の矢代真理子がヒロインの物語である。真理子は同僚の多久孝平に恋をする。孝平は同僚の藤原悠美子や、幼馴染の河瀬高子からも好意を寄せられていたが、最後は真理子と結婚する事になる。

真理子はビヤホールになら数回行った事があるが、バーには行った事がなかった（源氏 25:12-13）。頼まれて仕方なくバーへ行くが飲物は注文しない（源氏 25:25）。レストランで同行の男性2人がビールのグラスを空けた時も軽く口をつけただけで、その後バーに連れて行かれた際はジンを少なくしたジンフィーズを注文する事になった（源氏 25:106, 119）。姉の恋人と日本酒を飲む場面があるが、自発的なものではなく強要されただけである（源氏 25:211）。真理子も飲酒に消極的なヒロインと言える。

本作にはヒロインの恋敵となる女性が2人登場する。まず同僚の悠美子であるが、飲酒に積極的で、酔って手に負えない程に乱れると言われており、喫煙もする（源氏 25:52, 76）。悠美子は最終的に失恋し、自殺未遂を起こす。

もう1人の恋敵である高子は、青春女性出版株式会社で編集者として勤務しているが、社長令嬢という「女性権力者」の位置にある。飲酒にも積極的で、孝平を誘って飲みに行こうと考えたり、喫煙したりもする（源氏 25:164）。真理子と高子は孝平をめぐる恋敵の立場であるが意気投合する。高子は、孝平が悠美子と結婚するだろうと考え、真理子を「ヤケ酒」に誘う。

「二人でヤケ酒を飲んで、孝平さんの悪口をいってやりましょう。」

「まア、ヤケ酒？」

「女のヤケ酒って、おかしいかしら？」

「かまいませんわ、一生に一度だったら。」（源氏 25:183-184）

ここで真理子と一緒に「ヤケ酒」を飲む事を了承するが、「一生に一度」と条件を出している。これは限定的な飲酒への欲求と言え、高子よりも飲酒に消極的である事が強調されている。高子は、孝平には失恋するものの、最終的に別の男性と結婚する事になる。

本作では、飲酒に消極的な BG は結婚に向かい、飲酒に積極的な「女性権力者」は一度失恋するも別の相手と結婚する事になり、酒乱である BG は失恋し他の相手もいないという結末になる。

3-3. 『男性無用』

『男性無用』は、『週刊読売』（読売新聞社）1961年3月5日号から12月31日号に連載された。女性誌に連載されていた作品ではないが、これも女性の飲酒場面が多いので取り上げたい。

ヒロインは、T 化学工業総務課に勤務する 22 歳の宮沢いづみである。いづみの同僚女性が婚約者から、上司である部長の娘との縁談が持ちかけられたとの理由で婚約を解消される。いづみはこれを知って男性不信に陥り、男性無用論者となる。しかし最後は、いづみに好意を寄せる倉井郎太の真摯な行動を知り、倉井の愛を受け入れるという内容である。

いづみの飲酒場面は多いが、常に飲酒量は少なく表現される。バーに行った事は 3 度だけで、叔父にレストラン・バー・S に連れて行かれた際は、軽い酒として叔父が選んだジンフィーズに軽く唇をつける（源氏 30:20）。この後、同僚男性と行く事になったトリス・バーでは、既にジンフィーズを飲んでいたため、用心してジュースを選び、その後も付き合いでビールを少しだけ飲む（源氏 30:33,47）。後日、叔父の元恋人で堂前産業の女性社長・堂前左木子とレストラン・バー・S で食事した時も、美味そうにビールを飲む左木子を前に、軽く口をつけただけである（源氏 30:91）。また、叔父の家で、叔父と左木子と 3 人でウイスキーの水割りを飲む際は、いづみの分だけ特別にウイスキーが少なかった。更に叔父と左木子が新しい水割りを作った時、いづみは最初の水割りの 3 分の 1 も飲んでいなかった（源氏 30:118-119）。

そして、いづみが、後に恋敵となる、倉井の上司である部長の娘・富田裕子とレストラン・バー・S でビールを注文する場面がある。

「ねえ、ビールを飲みましょうよ。」

裕子がいった。

「まア、ビール？」

いづみが、ちょっとあきれたようにいうと、

「女同士だからって、ビールを飲んでいけないことはないでしょう？」

「そうね。飲みましょう。」

[中略]

「さア、カンパイしましょう。」

「ええ。カンパイ。」

二人は、グラスをきちんと合わせた。いづみは、五分の一ほどを、裕子は、三分の一ほどを飲んだ。お互いそれを見せ合って、また微笑をかわした（源氏 30:148-149）。

本作は女性同士の飲酒を2回描いている。前述したいづみと左木子の飲酒場面は、BGと女性社長の飲酒という点で階級・年齢の上下関係が明確であったが、裕子との飲酒場面はそれと異なる。裕福な裕子は働いている描写がなく無職と考えられるが、いづみと同年代で意気投合しており、ほぼ対等な関係の飲酒である。乾杯した後グラスを見せ合い、微笑みを交わす行為の中に、若い女性同士の飲酒の珍しさ、それを共有した連帯の意味が込められている。この飲酒は、裕子の提案で行われ、いづみは呆れながらも了承する形となっている。更にいづみの方が飲酒量が少なく、裕子よりも飲酒に消極的である事を表す。

これ以降もいづみの飲酒場面はあるが、積極的な様子はない（源氏 30:157, 207, 271, 277）。特にレストラン・バー・Sでは何度も飲酒するが、常に同時に注文するピフテキへの関心が強調され、飲酒の印象が薄まるような効果をもたらす。

いづみの恋敵となる裕子は、前述の通り、いづみとの比較により飲酒に積極的な様子が描かれ、最終的に倉井に失恋する。もう1人、倉井に恋愛感情を抱く倉井の同僚女性が登場するが、飲酒についてはバーに行く場面があるものの具体的な描写がなく積極的とも消極的とも言えない。

「女性権力者」の飲酒としては、女性社長である左木子がビールやブランデー・サワー、ウイスキーの水割りを積極的に飲む（源氏 30:91, 97, 118-119）。

また、いづみの会社の先輩で、29歳独身「オールド・ミス」の小野瀬敬子は、トリス・バーを1人で訪れてビール瓶1本近く飲んだり、倉井とおでん屋で日本酒を飲んだりと飲酒に積極的で、喫煙もする（源氏 30:44, 49, 236, 163-164）。敬子はかつて結婚を前提に交際していた同僚男性に捨てられ、独身状態であったが、最後にいづみの叔父と結ばれる。有能で親切な敬子に救済が与えられた形で、源氏の〈人柄主義〉故の措置と言えるだろう。

本作も、飲酒に消極的なヒロインが結婚し、積極的な恋敵が失恋する構図となる。

3-4. 『喜びと悲しみがいっぱい』

『女性明星』（集英社）1962年12月号から1963年12月号に連載された『喜びと悲しみがいっぱい』は、丸の内の一流企業で受付嬢として働く20歳の中河麻美子をヒロインとした物語である。麻美子は先輩の檜山五郎に恋をしているが、「妹」扱いされている。五郎には婚約者がいたが、彼女の浮気が発覚し婚約破棄となる。最後は麻美子と五郎が結婚する事を予感させる結末となっている。

麻美子は、物語の開始時点で飲酒経験が無く、飲酒に対する欲求も無かったが、五郎の飲酒を見て触発され、飲んでみたいと考えるようになる（源氏 31:257）。「妹」扱いされている麻美子にとって、飲酒は五郎と釣り合う成熟した女性になった事の証なのである。麻美子は五郎と訪れた銀座のレストランで、五郎に勧められて飲酒をするが、飲酒量は少ない。乾杯のビールを舐めるように飲み、その後もグラスの3分の1も飲んでいない状態であった（源氏 31:312-314）。また、別のレストランで五郎の男友達にビールを勧められた時も、少し口をつけただけであった（源氏 31:359）。

一方、麻美子の恋敵で同僚、五郎の婚約者・滝田昇子は、五郎とレストランで飲酒し、スタンド・バーに行っている（源氏 31:262-263）。具体的な飲酒の様子は記述されず積極的かどうかは判断できないが、麻美子よりは飲酒する女性として描かれる。

本作は、恋敵との飲酒の差が他作品よりも明確ではないが、飲酒に消極的なBGが結婚に向かう構成となっていると言える。

ここまで見てきた作品をまとめると、飲酒に消極的なヒロイン達は物語の開始時点で交際経験がなく、そこから恋愛成就・結婚する結末を迎える⁶。一方、ヒロインの恋敵となる女性はヒロインよりも積極的に飲酒し、失恋する傾向がある。そして「玄人」女性や「女性権力者」と位置付けられる女性は、当然に飲酒する存在として描かれる。

また、これらの作品の中には、男性が、女性が酔う事に嫌悪感を示すセリフがある。『女性自身』では、男性小説家が、バーでジンフィーズをグラス半分程一気に飲んだ女性秘書を見て「いっておくが、僕は、女の酔っぱらいは大きらいなんだぞ」（源氏 25:207）と言い、孝平が真理子と高子の「ヤケ酒」計画を知って「僕は、女のヤケ酒は大きらいなんだ」（源氏 25:232）と言う。更に『男性無用』では、ヒロインの叔父が「いっておくが、僕は、女の酔っぱらいは、大嫌いだからね」（源氏 30:97）と、『喜びと悲しみがいっぱい』では五郎の男友達が「僕は、女の酒飲みなんて、あんまり好きじゃアないんです。とって、全然飲めないのも困る」（源氏 31:359）と言う。女性の飲酒自体は非

難されるものではないが、そこには酩酊への嫌悪感があり、「酔わない程度」という節度が求められている。飲酒はあくまで消極的でなければならず、そのような飲酒態度の BG が「幸せな結婚」に導かれる事を示している。

4. 消極的な飲酒から積極的な飲酒に変化し、結婚するヒロイン——『御身』

ここでは、物語の開始時点では飲酒に消極的であったヒロインが、物語の進行とともに積極的になり、最終的には結婚する物語として、『婦人公論』（中央公論新社）1961年6月号から1962年9月号に連載された『御身』を見ていきたい。

『御身』は読者から賛否両論が沸き起こった作品である（源氏 34:347）。その理由は、ヒロインの BG が金のために愛人となり、性的欲望を持って性行為を何度もするからである。

ヒロインの矢沢章子は虎の門にある K 商事会社の総務課に勤務する 24 歳である。章子の弟で、浅草の M 玩具製造会社に勤務する利夫は、上司から預かった 30 万円を紛失してしまう。姉弟には両親がなく 2 人きりで生活しており、姉の月収は 1 万 2 千円、弟の月収は 1 万円、やっと貯金が 2 万 5 千円貯まったという経済状態であり、30 万円は大金である。章子は返済のため、バーで紹介された、日本橋の長谷川電機社長・長谷川虎雄と 6 カ月 30 万円の愛人契約を結ぶ。長谷川は 40 歳で、14 歳の娘を持つ寡夫である。章子は愛人として長谷川と接する中で本気で恋をするようになり、最後は結婚する。

一見すると章子は不本意に愛人という立場になってしまった悲劇のヒロインのようであるが、そこまで悲惨な状況にはない。長谷川は章子に 30 万円を渡した後、自分からは章子に連絡しない。章子は金を持ち逃げする事もできたが、金だけ貰って何もしないわけにいかないと長谷川を性行為に誘う。長谷川は我慢して性行為をしなくても良いと言うが、章子の望みで性行為をする。これ以降、章子は自分の性的欲望に従って長谷川と性行為を何度もするようになる。最終的には、2 人はお互いに恋愛感情を持っている事を確認し結婚する。2 人の関係が愛人としての性行為から始まり、恋愛へと発展し、最後に結婚するという過程が当時としては珍しく、「型破りの恋愛小説」（小松 357）と評された。

章子の飲酒は、当初は消極的であったが、愛人となり性行為を重ねると比例するように積極的になる。章子は元クラス・メートの姉がマダムをやっている京橋のバーで長谷川を紹介される時、ビールをグラス 1 杯飲むが、愛人になる不安と緊張を紛らわすために飲むだけである（源氏 34:12-15）。また、交際していた同僚・和気年久と銀座で食

事中、愛人契約を結んだ疚しさからビールをグラス 1 杯飲む (源氏 34:23)。いずれの場合も、好んで飲むわけではなく、精神的ストレスを誤魔化そうと飲むだけである。

その後、章子は、長谷川と訪れた代々木のホテルの部屋で、ビールを「ヤケ酒」のように飲酒し、初めて性行為をする (源氏 34:57)。以降、章子は、長谷川の他の愛人達に対抗してジンフィーズを飲むなど飲酒を重ね、飲酒量もビール瓶 1 本になる (源氏 34:79, 121, 136, 164)⁷。吸わずに吹かすだけであるが、喫煙もするようになる (源氏 34:4)。

このような章子の飲酒は、「玄人」女性に類似する愛人としての飲酒行動と解釈できるものであった。しかし最終的に章子は長谷川と結婚し社長夫人になる。章子の階級変化に合わせて、章子の積極的な飲酒行動は、結局は「女性権力者」であるが故のものと解釈できるよう仕掛けられている。

章子の恋敵の立場には、長谷川と再婚話が持ち上がっている未亡人と、長谷川の他の愛人であるバーのマダム、料亭の女将という 2 人の「玄人」女性がいる。未亡人は、バーでウイスキーの水割りを飲み、飲酒に積極的な女性として描かれる (源氏 34:80)。

また、『御身』では、BG の飲酒の仕方が、その BG が誰かの愛人であるかどうかを判断する材料となっている。章子の弟・利夫は取引先の会社に勤務する小沢咲子と交際するが、章子はホテルで咲子が中年男性と一緒にいる所を目撃しており、咲子とその男性の愛人なのではないかと疑いを持つ。章子に相談された長谷川は、章子、利夫、咲子と 4 人で食事をし、その時に咲子がグラスに半分程残っていたビールを軽く飲みほした様子を見て、咲子が愛人をやっていると確信する (源氏 34:136)。女性の飲酒の仕方が、その女性の性的行動を推測する判断材料となっている。

実際、長谷川の推測通り、咲子は経済的な理由で上司の愛人をしており、その事実を知った利夫は咲子と別れる。章子と咲子は共に金のために愛人となり、BG でありながら「玄人」女性に近い立場になったが、その飲酒行動にも共通性があるように描かれる。しかし、章子は最後には結婚によって社長夫人となり「幸せ」を掴む事になる。このような章子の大逆転劇は現実的ではなく、読者の女性に娯楽として提示された「夢」と言える。

5. 飲酒に積極的、結婚しないヒロイン

5-1. 『鏡』

飲酒に積極的で結婚しないヒロインの物語として、『婦人朝日』（朝日新聞社）1957年5月号から1958年6月号に連載された『鏡』を見ていこう。本作は、源氏がそれまでの明るい作風を打破しようとしたもので（源氏 10:339）、他作品よりも暗い雰囲気となっている。

ヒロインは宮本京子、丸の内の大都商事株式会社に勤務する23歳である。京子は15歳の時に母親を亡くし、その4年後に再婚した父親と義母を憎んでいる。愛情に飢えており、恋愛においては、同僚で恋人の田部、義母の弟である修治、上司で既婚者の桜田という3人の間で揺れ動く。桜田にはホテルに連れ込まれそうになり、直前で逃げる。田部との結婚を考えるが、田部は転勤先で新しい恋人を作っていた。次に修治との結婚を望むが、修治も同僚女性との結婚を決めてしまう。京子は2人の男性に立て続けに振られてしまい、結婚せずに物語が終わる。

京子の飲酒は積極的なものとして描かれる。まず物語の開始時点で、田部とおでん屋で日本酒を1合近く飲んで酔った状態である（源氏 10:172）。しかし、会社の先輩で28歳独身「オールド・ミス」の岩本成子と比較すると飲酒量が少ない。京子は成子に誘われ、新入社員の女性1人、男性1人と共に銀座の少し高級な中華料理店で食事をする。成子は当然のようにビールを注文し最初のコップを一気に飲む。京子はコップに半分程度飲み、新入社員の女性は口をつけた程度で、年齢・勤続年数の差がそのまま飲酒量の差となって示される（源氏 10:197）。

その後、京子は成子に連れて行かれた日本橋のバー「ロマン」で、ビールを飲み過ぎて酩酊し便所で嘔吐してしまうが（源氏 10:199-204）、このバーを気に入って通うようになる（源氏 10:215, 237-240, 252-256, 272-273, 335-336）。

また、京子が成子と、「ロマン」や成子の部屋で2人で飲酒する場面がある。特に成子の部屋では、成子が隠していた自身の恋愛事情を告白する。部屋の中という閉じた空間で、京子は「真ッ赤」になりながらビールをコップに2杯、成子は瓶1本程度を飲み、秘密を分かち合う（源氏 10:237-242）。ここでは飲酒を通じた2人の連帯が描かれる。この時の2人の飲酒を京子は「女のヤケ酒」と称する（源氏 10:245）。

それ以外でも京子は飲酒を重ねており（源氏 10:290, 334）、吹かすだけだが喫煙もす

る（源氏 10:204, 304）。

京子の恋敵となる女性は、田部の新しい恋人である田部の下宿先の大家と、修治の結婚相手である同僚女性であるが、2 人とも飲酒している様子はあっても具体的な描写はなく、消極的か積極的かは判断できない。

本作でヒロインと比較すべき存在は恋敵ではなく、先輩の成子である。京子より 5 歳年上で、飲酒量も多い成子は、京子が選択したかもしれない道程を辿った姿を示す。京子は桜田や田部と性行為に及ぶ可能性があったが直前に回避しており、貞操を守った形となっている。成子は 5 年前に独身時代の桜田にホテルに連れ込まれて性行為をしている。京子は会社を辞めて「ロマン」の女給になる事を考えるが結局会社に残る。成子は、同僚女性の婚約者と交際していた事が発覚したため、会社を辞めて「ロマン」の女給となる。同じ「オールド・ミス」でも人柄の良い『男性無用』の敬子と異なり、ヒステリックな面があり同僚女性を裏切っていた成子は結婚を望むも叶わない。

京子もまた 2 人の男性に続けて失恋し結婚を逃す。しかし、成子のように BG から逸脱する事なくその立場に留まった京子には、最終的には唐突に恋愛面で救いが描かれる。物語の終盤、突然、修治の友人男性が登場し、恋愛関係に進む事が示唆される。「幸せな結末」を基本とする源氏作品で、ヒロインを失恋したままで終わらせられなかったための救済措置のようである。ただ、物語としては失恋する描写に重きが置かれており、本作は飲酒に積極的なヒロインが失恋する物語と言える。

5-2. 『銀座立志伝』

最後に、『女性セブン』（小学館）1963 年 5 月 5 日号（創刊号）から 1963 年 12 月 18 日号に連載された『銀座立志伝』を見てみよう。この作品は、ヒロインが BG を辞めホステスになる物語であるため、厳密には BG 小説ではない。しかし、ヒロインはホステスとして働く上で、元 BG である事を宣伝文句に使い、BG の経験を活用して客と接する。元 BG である点が常に物語の根底にあるため、広い意味で BG 小説の一種と位置付けてここで論じたい。

ヒロインの寺沢一実 は田所電機株式会社に勤務していたが、会社が倒産したため、銀座のバー「東京一」のホステスとなる。ホステスとして働く中で、客の橋本から「スパイ」として他の客の情報を探るよう頼まれる。橋本は一実の仕事ぶりを認め、一実を「雇われマダム」にする。

一実は BG 時代からビール瓶 1 本飲む事が可能で、バーに何度も行った経験があり

(源氏 32:11)、最初から飲酒に積極的なヒロインとして登場する。更にホステスとして働く内に飲酒量が増え、ビール瓶2本飲むようになる(源氏 32:54)。

また一実の恋愛に関してだが、処女だった一実は物語途中で橋本の部下である石沢に恋をし、終盤で性行為をするものの、「あたしって、石沢さんにバージンをささげたということだけで満足すべきなんだわ」「そのかわり、あたしには銀座がある！」(源氏 32:198)と結婚は諦める。一実は初めから飲酒に積極的で、結婚せずに「玄人」女性としての出世を選んだヒロインと言える。一実はBGの立場からも、BGの次の段階に想定されている「妻」の立場からも、逸脱した存在なのである。

井原あやは本作について、「B・Gとはケタ違いの給与を得て、美しい服で銀座を闊歩する一実の姿は、読者であるB・Gたちに、ほんのひと時であれ、夢の世界を提示したのではなかろうか」(井原 [2016] 58)と述べ、結婚退職するまでの一時的な労働者とされるBGが現実逃避として楽しむ「憧れ」であると指摘する。

高度経済成長期は、雇用の場にB・GやO・Lと呼ばれる、働く若い女性たちを創出した。しかし、彼女らの存在が、サラリーマンの夫と専業主婦の妻という家庭を築くまでの「腰掛け」的亜流の労働力であったことを言うまでもない。そうしたB・Gたちを主要読者とする『女性週刊誌』⁸の誌面にあらわれた「銀座立志伝」の一実は、企業内でB・Gという立場より上に昇進することを期待されず、職場のヒエラルキーにも入り込むことを許されないB・Gの限界を知ったうえで見る密やかで危うい憧れであるといえよう(井原 [2016] 59)。

このような読者にとっての「憧れ」を描いている点は、愛人から社長夫人になる『御身』も同様と言える。小松伸六は『御身』について、「考えようでは、章子は三十万円シンデレラ姫登場ともいえますから、この作品を楽しい現代の童話とよんでもいいとおもいます」(小松 357)と述べている。『御身』『銀座立志伝』に描かれたヒロインは、その他の多くの作品に描かれたような、飲酒に消極的で結婚に向かうヒロインとは異なり、非現実的な「憧れ」の対象となる存在である。そして、そうした非現実的な「憧れ」の中でしか、飲酒に積極的なヒロインが結婚で階級上昇したり、仕事で出世したりする形の「幸せな結末」は描かれなかったと言える。

6. 節度ある飲酒

ここまで源氏 BG 小説における女性の飲酒について、ヒロインの飲酒態度と結婚の関連性を考察してきた。異色作である『御身』『鏡』『銀座立志伝』を例外として、基本的にヒロインの BG は飲酒に消極的であり、飲酒に積極的な恋敵に勝って、「幸せな結婚」をする事になる。このような飲酒をする BG 像は、『酒』に記述された、職業上の進出から主体的に飲酒を楽しむ BG の姿とは異なっている。

源氏の BG 小説において当然の如く飲酒していたのは、「玄人」女性と、社長夫人や社長令嬢、女性社長といった「女性権力者」であった。つまり飲酒する女性に付与されるイメージとは、性的なものと、権力性であると言える。会社内でサラリーマンと同等の立場になる事はなく、いずれは家庭内で貞淑な「妻」になる事を目標に設定された BG は、非性的・非権力的でなければならなかった。そのために、ヒロインの飲酒は消極的に描かれたと考えられる。

実際、BG が仕事関係の場で飲酒する時は節度ある飲酒が推奨されていた。『週刊平凡』（平凡出版）1962年12月20日号に掲載された「“あたしダメなの、では男性にきらわれます BG がチャーミングにお酒を飲む方法 誌上コーチ」の記事は、クリスマスパーティーや忘年会においての適切な振る舞いを BG に指南する内容で、『酒』編集長の佐々木のアドバイスも紹介している。タイトルからして男性の評価を意識したものとなっているが、記事内でも BG の飲酒行為は男性から鑑賞・批評されるので注意が必要と述べている⁹。

ビルの一室で仕事をしているときと、たたみの部屋で日本酒とビールが並ぶときとでは、だれでもちがう状態になることはたしかだ。そういう席上で、ふだんまじめによく仕事をするあの女性はどうなるだろう、ということは、多かれ少なかれ周囲の男性のすべてが興味をもっていることなのだから、こころしたいもの（「“あたしダメなの、では男性にきらわれます」 66）。

そして、結論部分では節度ある飲酒を推奨している。

まとめてみれば、女性が酒に酔うのはあまり美しくない、ということになりそう。そこで節度のある飲み方で雰囲気をつたのしみ、スマートにジュースでもつきあえ

る方法を研究しておくことがけんめいだろう（「あたしダメなの、では男性にきらわれます」 67）。

BG が仕事関係の場で飲酒する時には、男性の視線を意識した節度ある飲酒が推奨されていた。しかし源氏 BG 小説で描かれるヒロインの飲酒は仕事関係ではなく私的な飲酒である。源氏は BG に推奨される節度を私的な飲酒の領域にまで拡大して描き出したと言える。

7. 女性同士の飲酒

『酒』は、BG が男性に付随してだけではなく、BG 同士で飲みに行っていると記述していた。しかし、源氏 BG 小説では男性に付随した形で飲酒する事が多く、BG 同士でも、BG ではない女性とでも、女性だけで飲む事はほとんど無い。『女性自身』では真理子と高子と一緒に「ヤケ酒」をしようと計画していたが、実際に 2 人で飲む事はなかった。『男性無用』では、レストラン・バーでのいづみと左木子、いづみと裕子の飲酒が描かれたが、どちらも BG 同士ではない。BG2 人の飲酒は、『鏡』における、京子と成子のバーと家での飲酒場面のみである。しかし、前述のように京子も成子も飲酒に積極的で結婚できない女性として描かれており、BG 同士の飲酒は「幸せな結末」に導かれるものとはなっていない。

源氏は、『サンデー毎日』（毎日新聞出版）1958 年 11 月 2 日号から 1960 年 6 月 19 日号に連載した、大阪を舞台とするサラリーマン小説『新・三等重役』では BG を含む女性集団の飲酒を描いている。別府で開かれた、得意先企業関係者の妻を集めた懇親会は、男性だけの宴会より盛り上がりを見せる（源氏 23:230-232）。福岡では先代社長夫人が支店勤務の BG6 人を招待して宴会を開く（源氏 23:261-271）。BG6 人と元 BG1 人が送別会で飲酒をした描写もある（源氏 24:140-141）。女性集団の飲酒は、その場に居合わせた主人公（サラリーマン）や男性達を圧倒し、その様子が喜劇性をもって描かれる。このような女性の集団での飲酒は、BG 小説では描かれない。女性だけの飲酒は、あっても 2 人である。

サラリーマン小説では、女性集団の飲酒は主人公のサラリーマンの視点で、あくまでも鑑賞の対象として記される。しかし BG 小説で、ヒロインの BG が当事者として女性集団の飲酒を行うとすると、そこには男性の視線が介在しなくなる。女性誌中心に連載した BG 小説は、一般週刊誌に連載したサラリーマン小説よりも、女性読者を意識して

執筆されたはずである¹⁰。男性不在の女性集団の飲酒を女性読者が受容する、このような状態を避けるため、BG 小説では女性集団の飲酒を描かなかつたのではないか。つまり、男性が存在しない状態で、飲酒を通して女性が連帯し団結する様子を女性読者に提示したくないという意図が働いたと考えられる。

8. おわりに

戦後、1955 年頃から、BG は職業上の進出、経済力の獲得を背景に飲酒に踏み出した。それは、明治期に始まった「素人」女性の飲酒に対する抑圧からの解放であった。しかし、フィクションの領域において、源氏 BG 小説は飲酒に消極的な BG が「幸せな結婚」をする物語を描いた。その物語は、飲酒自体は容認するものの、男性も存在する場で消極的に飲酒する事を規範として示し、現実の BG の飲酒行動を不可視化した。源氏 BG 小説は多くの雑誌で連載しており、そこで示した規範が女性読者に与えた影響は大きいものであつただろう。それは女性の飲酒に対する新たな抑圧となって機能したと考えられる。

女性の飲酒が増加してから約 10 年後、1964 年の『酒』で守屋理助（大日本製糖砂糖部長¹¹）は「婦人も気の毒である。戦後は、女権伸長から女性の酒飲みという人もふえたし、なかなかいける口もある。しかし、結局は殺して飲んでいる」（守屋 46）と述べる。戦後、確かに女性は飲酒するようになったが、そこには新たな抑圧があり、自由に飲酒を楽しむ事ができる状況はいまだ遠かつたと言える。

引用文献

一次文献

源氏鶏太『源氏鶏太全集』全 43 巻、講談社、1965–1967 年。

二次文献

「“あたしダメなの、では男性にきらわれます BG がチャーミングにお酒を飲む方法 誌上コーチ」、『週刊平凡』12 月 20 日号、平凡出版、1962 年、64–67 頁。

阿部健『どぶろくと女——日本女性飲酒考』、酒文化研究所、2009 年。

天江秀次郎（天賞）・早坂芳雄（松華）・伊沢久弥（竹に雀）・鈴木浩藏（勝来）・鈴木源寿（金兜）・川名儀之助（黄金沢）・菅原甚寿（千松島）・高木清一（鳳山）・菅原雅（伏見男山）・門伝東吾（太閤）・佐々木久子「酒つくり二世さんと語る 女性開拓」、『酒』5 巻 9 号、酒之友社、1957 年、60–68 頁。

淡谷のり子（歌手）・池田みち子（作家）・笠置八千代（評論家）・矢崎武子（漫画家）・眞山くみ子（映画女優）・佐久間みよ子（デザイナー）・遠藤春（料亭喜可久）・松堺屋二郎（葎町芸妓）・長部葆弘（「大関」常務）・佐々木久子「春宵 ほろ酔い口ぜつ 男性をサカナに」、『酒』5 巻 4 号、酒之友社、1957 年、6–17 頁。

石黒久美子「雑誌『酒』に見る戦後の女性の飲酒」、『身体表象』3 号、学習院大学身体表象文化学会、2020 年、72–92 頁。

井原あや「源氏鶏太「銀座立志伝」論」、『相模国文』43 号、相模女子大学国文研究会、2016 年、45–60 頁。

——「『女性自身』と源氏鶏太——〈ガール〉はいかにして働くか」、『国語と国文学』94 巻 5 号、明治書院、2017 年、137–150 頁。

小松伸六「解説」、源氏鶏太『御身』、角川書店、1965 年、353–358 頁。

金野美奈子『OL の創造——意味世界としてのジェンダー』、勁草書房、2000 年。

斎藤美奈子『モダンガール論——女の子には出世の道が二つある』、マガジンハウス、2000 年。

真実一郎『サラリーマン漫画の戦後史』、洋泉社、2010 年。

守屋理助「ビジネスをはなれて」、『酒』12 巻 2 号、酒之友社、1964 年、46–47 頁。

安井海洋「酔う女——徳田秋聲『新世帯』と明治期の飲酒文化」、伊藤信博編『酔いの文化史——儀礼から病まで』、勉誠出版、2020年、210–222頁。

【表】源氏鶏太BG小説における女性の飲酒と結婚									
	最高殊勲夫人	女性自身	男性無用	喜びと悲しみが いっぱい	御身	鏡	銀座立志伝		
「玄人」女性の飲酒	○	○	○	—	○	○	○		
女性権力者の飲酒	社長夫人 専務夫人 社長令嬢（ヒロイン の恋敵）	社長令嬢 （ヒロインの 恋敵）	女性社長	—	—	—	—		
ヒロインの恋敵の飲酒	社長令嬢 《積極的》	BG 《積極的》 社長令嬢 《積極的》	部長の娘 《積極的》 BG ○	BG ○	未亡人 《積極的》 「玄人」女性 《積極的》 ○	大家 ○ BG ○	—		
ヒロインの飲酒	《消極的》 ビール、コップ半分 低アルコールの カクテル	《消極的》 ビール、軽く口を つけただけ ジンの少ないジン フィーズ 強要されて日本酒	《消極的》 軽いジン フィーズ ビール、少し だけ ウイスキーの 少ない水割り	《消極的》 ビール、グラス に3分の1	《消極的》 ビール、グラス1杯 ↓ 《積極的》 ジンフィーズ ビール瓶1本	《積極的》 日本酒1合 ビールを飲み 過ぎて酩酊	《積極的》 ビール瓶1本 ↓ ビール瓶2本		
ヒロインの結婚	○	○	○	○	○	×	×		
				結婚すると予感 させる結末	結婚して社長夫人	× 新しい恋愛 開始			

註

- ¹ BG という言葉は、1964 年の東京オリンピックを前に、英語圏からすると売春婦を連想させるとして使用されなくなり、代わりにオフィスレディ（OL）が使用されるようになった（斎藤 203-204）。
- ² この記事では、丸かっこ内に所属する酒蔵が造る日本酒の銘柄名が記されている。
- ³ 源氏作品の引用は全て『源氏鶏太全集』から行い、（源氏 巻数:頁数）として示す。
- ⁴ 他の源氏作品でも、男性はビール瓶 2 本を基準に注文する事が多く、それ以上に飲酒する場合もある。
- ⁵ この時期、源氏作品だけでなく、会社を舞台とした作品（例えば映画「社長シリーズ」等）では、会社は同族経営の場合が多く、社長夫人や社長令嬢は役職に就いていなかったとしても、身分の上で、権力を付与された存在として描かれた。
- ⁶ 他に、若い世代向けの娯楽雑誌に連載された『娘の中の娘』（『小説サロン』[講談社]1958 年 1 月号から 12 月号に連載）、『若い仲間』（『明星』[集英社]1959 年 6 月号から 1960 年 6 月号に連載）も同様に飲酒に消極的なヒロインが結婚する物語となっている。
- ⁷ 『御身』は映画化されているが（島耕二監督、大映、1962 年）、映画では章子の性的欲望や飲酒行為は原作よりも抑制的である。章子は長谷川と愛人契約最終日まで性行為をせず、飲酒描写も少ない。
- ⁸ 原文ママ。
- ⁹ 飲酒の場において、女性が飲酒行為を男性に一方的に鑑賞され、評価される事については、石黒の論文を参照（石黒 72-92）。
- ¹⁰ 源氏は『喜びと悲しみがいっぱい』に関して、掲載する雑誌の性質から想定した読者をいつも頭の中に入れて執筆したと述べており、雑誌による描き分けを意識していた（源氏 31:403）。
- ¹¹ 原文ママ。